

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 国語

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— センター試験を踏まえつつ、複数テキストや応用的思考の設問が出題 —

昨年のセンター試験と比べて、設問数は減少、解答数は増加。センター試験の出題傾向を踏まえつつも、第1問では、文章を理解するために作成されたノートを用いた出題が、第4問では、詩と文章との複数テキストでの出題がなされるなど、試行調査と同様、複数の文章や資料を関連付けて考える力が求められた。昨年センター試験よりやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	大問数4、各大問の配点50点は昨年センター試験から変更なし。設問数は第1問で1問、第3問で1問減り、全体として2問減(24→22)。解答数は第1問で1個、第4問で2個増え、全体として3個増(35→38)。
【出題形式】	第1問は妖怪に関する論理的文章からの出題。問5で文章の内容を理解するために作成したノートが3つ示され、そのなかに出典の別の箇所でも引用されている芥川龍之介の小説「歯車」の一節も含まれていた。第2問は近代作家の小説からの出題。問6では、本文に関する批評文の一部が示された。第3問は、和歌を複数含む古文からの出題。第4問は漢文からの出題で、「御術」についての詩と文章の複数テキストが題材であり、文章に関するイラストも示されていた。
【出題分野】	昨年までのセンター試験と同様、近代以降の文章2題、古文1題、漢文1題という構成であった。
【問題量】	第1問は3300字、第2問は3600字、第3問は900字。第4問は、問題文Iが110字、問題文IIが66字だった。
【難易】	昨年センター試験よりやや難化。

2. 大問別分析

第1問 「近代以降の文章」 (50点・解答数12) 香川雅信『江戸の妖怪革命』／芥川龍之介「歯車」

「妖怪」の歴史的変遷について論じた論理的文章。設問中で出典の別の箇所に言及し、そこで引用された小説の一節を取り上げるなど複数テキスト型の出題となっている。設問は、問1は漢字、問2～問4は文中の対比関係などを把握する力を問うオーソドックスな読解設問。問5が生徒の作成したノートという体裁(平成30年度試行調査の第1問で出題された形式に近いもの)で、実用的場面を想定し、複数テキストにより応用的思考力を問うものとなっている。本文および問4までは昨年までのセンター試験を概ね踏襲しつつ、問5では共通テスト特有の設問を出題するという構成だといえる。

第2問 「近代以降の文章」 (50点・解答数9) 加能作次郎「羽織と時計」／宮島新三郎「師走文壇の一瞥」

近代作家の小説の一節。「私」とW君との交流が「羽織と時計」をめぐる話として描かれている。問1は語義の設問。問2～問5は人物の心情を場面の展開に沿って問うもので、昨年までのセンター試験の小説での設問形式を踏襲している。問6は当時の批評家の文章を掲げた複数テキストの形で新傾向の出題。掲げられた批評文と本文とを関連付けて読み解きつつ、批評文とは異なる見解を考える発展的思考力も求められている。

第3問 「古文」 (50点・解答数8) 『栄花物語』／『千載和歌集』

『栄花物語』からの出題。『栄花物語』は平安時代の歴史物語。本文の分量は、昨年のセンター試験の約1300字から約900字へと大きく減少した。問3の表現に関する設問、問4の登場人物についての設問、問5の本文中の和歌と他のテキストにおける和歌との違いについて問う設問は、平成30年度の試行調査の設

問形式をほぼ踏襲している。問2の長家の応答の理由を問う設問は、理由が直接示されておらず、本文の表現を手がかりに長家の心情を推測するものであった。

第4問 「漢文」 (50点・解答数9) 欧陽脩『欧陽文忠公集』／『韓非子』

昨年センター試験に引き続いて長編の詩が出題され、平成29年度・平成30年度の試行調査と同様に、二つの問題文による出題がなされた。設問としては、問3と問6において二つの問題文を関わらせて解くことが要求された。それを除いては、文字・語句の意味や書き下し文、解釈などが問われ、文脈や傍線部における対比の關係に注目させるなど、従来のセンター試験の設問を踏襲するものであった。

3. 過去5カ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	119.33	121.55	104.68	106.96	129.39

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 英語・リーディング

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 全大問で読解型の新形式に変わり、様々な題材が場面や状況に応じて取り上げられた —

すべて読解問題となり、題材は日常的なものから意見文や叙述文まで様々な内容が扱われた。設問では意見と事実の区別を問うものやプレゼンテーションのスライドを完成させるもの、解答として当てはまるものを二つ選ぶもの等が出題された。読解量が大幅に増加し、多面的に情報を処理することが求められた。昨年センター試験よりやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	配点が昨年のセンター試験の200点から100点となった。大問数6は、昨年のセンター試験から変更はなかったものの、昨年54個だった解答数は47個に減少した。
【出題形式】	発音・アクセントや文法・語彙の問題はなくなり、全大問において読解型の新形式となった。
【出題分野】	実際のコミュニケーションの場面を意識した、多岐にわたるジャンル・形式の出題。概要の把握から複数情報の整理・比較・判断まで多面的な資質・能力が求められた。複数の大問で、イギリス英語による出題がなされた。
【問題量】	素材文語数は、昨年のセンター試験から約1100語増加（約2800語→約3900語）。
【難易】	昨年センター試験よりやや難化。

2. 大問別分析

第1問「情報・意図の読み取り」（10点・解答数5）

Aでは「忘れ物」に関するスマホ上のメッセージのやりとりを取り上げ、日常生活に関連した英語素材を通して基本的な読解力が問われた。Bでは「ミュージシャンのファンクラブへの加入」に関するウェブ上の記事から、速く正確に、必要としている情報を読み取る問題が出題された。

第2問「概要・要点の把握、情報整理」（20点・解答数10）

Aでは「英国の学校でのバンドコンテスト」に関する審査員3名の評価を取り上げ、書かれている情報から各バンドのパフォーマンスに関する審査結果を比較したり、事実と意見を区別して内容に合う記述を選んだりする問題が出題された。Bでは「クラブ活動の時間短縮の是非」に関するオンライン・フォーラム上のやりとりを読んで、概要や要点を把握したり、それぞれの主張を事実に基づいて整理したりする問題が出題された。

第3問「短い文章の概要把握」（15点・解答数8）

Aでは「英国旅行における空港からホテルへの交通手段」に関するウェブ上の質問と、それに対する回答を取り上げ、書かれている内容とともに図表の情報も踏まえて解答する問題が出題された。Bでは「異文化交流センターを維持するための募金」に関する記事を読んで、出来事の順番や話の細部までを把握する問題が出題された。

第4問「複数素材からの情報読み取り」（16点・解答数6）

「姉妹校の生徒をもてなすスケジュール」に関してやりとりしたEメールが二つ取り上げられ、一方には図表が添えられた。二つのEメールの内容と図表の情報を整理して解答する問題、それらをもとに最適なスケジュールを考える問題などが出題された。

第5問「概要把握、要点整理」（15点・解答数9）

「Astonという名前の牛と飼い主のSabine」を軸としたストーリーの情報を参考に、彼らに関する出来事を時系列に並べるなど、プレゼンテーション用のスライドを完成させる問題が出題された。

第6問「概要・要点・論旨の把握」（24点・解答数9）

Aでは「アイスホッケーの安全性」に関する記事を読んでポスターを作り、それを使ってクラスで発表する設定で、そのポスターに載せる項目を選ぶ問題が出題された。また、文章全体の展開や複数の文の論理関係を考えたり、内容を要約したりする問題が出題された。Bでは「天然・人工の甘味料」に関する文章が取り上げられた。文章全体の内容に合った選択肢を二つ選ぶ問題や筆者の主張・立場に最適な選択肢を選ぶ問題などが出題された。

3. 過去5カ年の平均点（大学入試センター公表値）

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	116.31	123.30	123.75	123.73	112.43

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 英語・リスニング

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 大問数が増加し、第3問以降、音声は1回のみ。図表を用いた出題も散見された —

昨年センター試験と比べて音声情報と図表などの視覚情報を組み合わせて答える問題が増えた。日本語で設問の状況を与えられるなど、各場面や目的に応じた聞き取りを要する実践的な英語力が問われた。取り組みやすい問題も見られたが、第3問以降は音声は1回しか流れなかったため、昨年センター試験よりやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年センター試験と比べて、配点が50点から100点、大問数4から6、解答数25個から37個に増加した。
【出題形式】	英文が比較的短い第1問と第2問では音声の流れる回数が2回だったが、第3問以降は1回のみとなった。第5問では大学の講義が想定されており、第6問Bは日常的なトピックに関する4人の会話であった。なお、一部の設問に、イギリス人や日本人を想定したと思われる話者が含まれていた。
【出題分野】	日常的な発話から説明文や4人の話者による会話まで、多岐にわたるジャンル・形式の出題。概要の把握から複数情報の整理・比較・判断まで多面的な資質・能力が求められた。
【問題量】	配点・大問数の増加に伴い、聞き取る問題音声の語数は昨年センター試験から300語以上増加。読み取る問題の分量も昨年センター試験から増加。
【難易】	昨年センター試験よりやや難化。

2. 大問別分析

第1問「短発話・英文／イラスト選択」（25点・解答数7）

A・Bともに身の回りの事柄に関する短い発話を聞き、Aでは最も近い意味を示す選択肢を選ぶ問題、Bでは発話内容に対応するイラストを選ぶ問題が出題された。発話の概要や要点を把握する力が問われた。問5では、almostの正確な意味を理解しているかどうか問われた。音声は流れる回数はA・Bとも2回であった。

第2問「短い会話・イラスト選択」（16点・解答数4）

身の回りの事柄に関する短い会話とそれについての問いを聞き、日本語で書かれた場面の情報をもとに、対応するイラストや図を選ぶ問題が出題された。問11では、エレベーターの位置を特定する問題が出題され、段階的に場所を特定していく必要があった。音声は流れる回数は2回であった。

第3問「短い会話・Q & A 選択」（18点・解答数6）

身の回りの事柄に関する短い会話を聞き、日本語で書かれた場面の情報を参考にしながら概要や要点を把握し、問いの答えとして適切なものを選ぶ問題が出題された。問13では、台所で最初に片付けるものを選ぶ問題が出題された。最初に使用するものと混同せずに情報を整理する必要があった。音声は流れる回数は1回であった。

第4問「モノログ・図表／条件選択」（12点・解答数9）

Aの問18～21では、学校以外での時間の使い方に関する説明を聞き、円グラフの項目を埋める問題が出題された。計算が必要な問題も含まれていた。問22～25では、DVDの値下げに関する説明を聞き、表の中の

空欄を埋める問題が出題された。Bでは、ミュージカルに関する4人の説明を聞き、与えられた3つの条件に最も合うものを選ぶ問題が出題された。複数の情報を整理し、組み合わせて判断することが求められた。音声が行れる回数はA・Bとも1回であった。

第5問「講義・ワークシート完成」 (15点・解答数7)

「幸福観」についての講義を聞き、ワークシートを完成させたり、与えられたグラフを参考に講義全体の内容と一致するものを選んだりする問題が出題された。概要や要点をとらえたり、聞き取った情報とグラフから読み取れる情報を組み合わせて判断したりすることが求められた。音声が行れる回数は1回であった。

第6問「会話文Q & A / 内容把握」 (14点・解答数4)

Aでは、フランス留学での滞在先に関する2人の会話を聞き、話者の主張を選ぶ問題と、主張を踏まえてどのような決定をする必要があるかを選ぶ問題が出題された。Bは、レシートの電子化に関する4人の会話を聞き取る問題であった。4人の立場を明確にしたうえで、レシートの電子化に賛成した人数を選んだり、電子化に反対の意見を最もよく表している図表を選んだりする問題が出題された。音声が行れる回数はA・Bとも1回であった。

3. 過去5カ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	28.78	31.42	22.67	28.11	30.81

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 数学IA

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 数と式、場合の数と確率で会話文、2次関数で現実の事象を扱う問題が出題された —

昨年センター試験と比較すると、大問数、配点は変わらず、一方で試験時間増加に伴い文章量や計算量は増加した。第1問、第3問の一部で会話形式の問題が出題され、第2問「2次関数」で陸上競技のストライドとピッチに関する現実の事象を題材とする問題が出題された。難易は昨年センター試験並。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年のセンター試験と同様、大問数は5問であった。第1問、第2問は必答で、第3問～第5問から2大問選択する形式であった。必答の第1問と第2問はどちらも2中間形式であった。
【出題形式】	昨年のセンター試験同様、数値を答える形式が中心であったが、適切な語句や文章を選択する問題が10題程度出題された。必答問題の第1問は、数学の事象に関する問題、第2問は現実の事象に関する問題が出題された。また、第1問〔1〕と第3問で会話形式の問題が出題された。
【出題分野】	集合と命題を除く全ての分野から出題された。ただし、数学Aの3分野からは、2分野選択。
【問題量】	総ページ数は23～24ページで、昨年のセンター試験より増加した。
【難易】	昨年センター試験並。

2. 大問別分析

第1問「数と式」、「図形と計量」 (30点・解答数16) [1]は数学Iと共通、[2]は数学Iと一部共通 必答

〔1〕は文字定数 c を含む2次方程式の解の問題。(1)、(2)は c の値を与えたときの方程式の解、および、解に関する整数部分を求める問題。(3)は方程式が有理数の解をもつための整数 c の条件について、会話形式で問題提起をしている。〔2〕は、 $\triangle ABC$ の外側に3つの正方形と3つの三角形をかき、これらの図形の面積の大小関係や、外接円の半径について考える問題。(1)は b 、 c や $\cos A$ の値が具体的に与えられるので落ち着いて計算をすればよい。(2)、(3)、(4)は、辺の長さや角の大きさの大小関係など、条件の与え方や解答群の与え方が従来のセンター試験とは異なり、困惑した受験生も多かったのではないと思われる。

第2問「2次関数」、「データの分析」 (30点・解答数12) [1]は数学Iと共通、[2]は数学Iと一部共通 必答

〔1〕は、陸上競技のストライドとピッチに関する現実の事象を題材にした問題。最終的に、100m走のタイムが最もよくなるストライドとピッチを2次関数を用いて考察する。(1)は問題文で示された定義に従って、100m走のタイムをストライド x 、ピッチ z で表せばよい。(2)はまず x と z の関係を1次式で表し、それを誘導に従い y の式に代入することが求められた。 y は x の2次関数となるので、最後は y の最大値とそのときの x とタイムを求めればよい。〔2〕は、都道府県別の就業者数の産業別男女別についての割合を扱った実際のデータに関する問題。(1)は箱ひげ図から正しくない記述を選択する問題で、(2)は(1)の箱ひげ図から正しいヒストグラムを選ぶ問題で、四分位数などの正しい理解が問われた。(3)は与えられた散布図から記述の正誤を判定する問題。散布図から相関関係を読み取る力が問われた。(4)は就業者割合と男性の散布図から就業者割合と女性の散布図を選ぶ問題。男性と女性を合計すると100%となることに注意して散布図を選ぶことが大切であった。

第3問「場合の数と確率」 (20点・解答数7) 選択

当たりくじを引く確率が異なる複数の箱からくじを引き、どの箱からくじを引いた可能性が高いかを、条件付き確率を用いて考察する問題。(1)は反復試行や条件付き確率の意味を理解していれば、比較的容易に解答できる。(2)は(1)で得られた結果をもとに成り立つ事実を考察する問題であった。また、

(3)、(4)は、会話形式で考え方の筋道が示されており、前問までの結果を利用して解き進める必要があった。

第4問「整数の性質」 (20点・解答数11) 選択

円周上に並んだ15個の点を、さいころの出た目によって決められた規則にもとづいて石を進めていく操作を繰り返したときの石の位置に関する問題。(1)、(2)は誘導に従い不定方程式を解き進めればよい。(3)は15個先の点に移動させると元の点に戻ることができるかがポイントであった。(4)は5個の点に到達する最小回数を求めて比較する必要がある、計算が複雑であった。

第5問「図形の性質」 (20点・解答数10) 選択

3辺の長さが3、4、5の直角三角形の外接円、内接円を題材とした問題。角の二等分線の性質、三平方の定理、三角形の相似、2円が内接する条件、方べきの定理などが幅広く問われた。円Pはかきにくく、円Oの直径が辺ACの長さに等しいことに着目することがポイントであった。また、方べきの定理の誘導に乗れたかどうかで差がついたと考えられる。最後の設問では、方べきの定理の逆を利用し、4点が同一円周上にあるかどうかを判定することが難しい。

3. 過去5カ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	51.88	59.68	61.91	61.12	55.27

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 数学IIB

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 試行調査同様、会話形式の問題やグラフを選択する問題が出題された —

関数の性質やグラフの特徴を考察する問題、会話形式での問題が、試行調査と同様に出題された。また、これまでのセンター試験では第5問であった「確率分布と統計的な推測」が第3問で出題された。昨年のセンター試験と比較すると、ページ数は増加したが計算量が減少したため、昨年センター試験より易化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年のセンター試験と同様に、大問数は5大問であった。第1問、第2問は必答で、第3問～第5問から2大問を選択する形式であった。例年のセンター試験と異なり、第3問が「確率分布と統計的な推測」、第4問が「数列」、第5問が「ベクトル」からの出題であった。必答の第1問は2中間形式であった。
【出題形式】	これまでは数値を答える形式が中心であったが、今年は解答群から適切な式や文章を選ばせる形式が20問程度あり、昨年のセンター試験より大幅に増加した。
【出題分野】	昨年通り、数学IIの分野が60点分、数学Bの分野が40点分の出題であった。ただし、数学Bの3分野からは、2分野選択。
【問題量】	昨年のセンター試験よりページ数は4ページ程度増加したが、計算量は減少した。
【難易】	昨年センター試験より易化。

2. 大問別分析

第1問「三角関数」、「指数関数・対数関数」 (30点・解答数19) 数学IIと共通 必答

〔1〕は三角関数の合成を利用して、三角関数の最大値を求める問題。過去のセンター試験では、 \sin への合成がほとんどであったが、今年は \cos へ合成する問題が出題されており、戸惑った受験生も多かったであろう。〔2〕は2つの指数関数について、値の計算、および、恒等式になっているものを選択する問題。〔3〕は対話形式で、指数関数と三角関数の類似性について考察する問題であった。

第2問「微分法・積分法」 (30点・解答数15) 数学IIと共通 必答

〔1〕、〔2〕の前半は、2次関数や3次関数のグラフと y 軸との交点における接線を求める問題。後半は、一般的な2次関数のグラフとその接線で囲まれる図形の面積や、3次関数のグラフと接線の y 座標の差が最大となる x を求める問題であった。基本的な内容が中心であるが、試行調査でも問われたようなグラフの形状を選択する問題も出題された。

第3問「確率分布と統計的な推測」 (20点・解答数11) 選択

ある高校の1週間の読書時間について考察する問題。〔1〕は、読書をしなかった生徒に関して、二項分布に関する平均と標準偏差を求める問題。〔2〕は異なる母比率に対する正規分布の確率を問う問題。〔3〕は信頼度95%の信頼区間についての理解を問う問題。〔4〕、〔5〕は同じ母集団であるが、異なる標本を扱ったという点で、目新しい問題であった。読書時間に関するデータを扱う点や、信頼区間について考察する点などは平成30年度に実施された試行調査と同様の出題であった。

第4問「数列」 (20点・解答数12) 選択

前半は、与えられた等式を満たす等差数列 $\{a_n\}$ 、等比数列 $\{b_n\}$ を決定する問題。後半は、これらを用いて新たに定義される数列 $\{c_n\}$ 、 $\{d_n\}$ に関する問題。〔1〕は一般項を文字定数 p 、 r で表し、代入することで得られた等式から、 p 、 r を求める問題。〔2〕は $\{a_n\}$ 、 $\{b_n\}$ の和を求める基本的な問題であった。〔3〕では $\{c_n\}$ がどのような数列になるかを、〔4〕では $\{d_n\}$ が等比数列になるための必

要十分条件を考察する問題。数列の基本事項を理解したうえで、与えられた誘導に従うことがポイントであった。

第5問「ベクトル」 (20点・解答数8) 選択

1辺の長さが1である正五角形や正十二面体について考察する問題。(1)は正五角形における角の大きさや、1辺の長さとお角線のお長さの比を求める問題。(2)は正十二面体において、ベクトルのお大きさや内積の値を(1)の結果を用いて求める問題。昨年のおセンター試験同様、ベクトルのお関係式から図形のお形状を考察する問題が出題された。(2)は、 a の値を計算過程のどこで代入したかで差がついたと考えられる。

3. 過去5カ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	49.03	53.21	51.07	52.07	47.92

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 日本史B

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— グラフや新聞、地図など多様な史資料から多面的・多角的に考察する力が求められた —

大問数6は昨年センター試験から変更なしだが、解答数は4個減少して32個となった。史料、地図、写真などの多様な資料が用いられ、史資料の読解力が重視された。社会経済史の出題は増加し、現代史の割合も増加した。基礎・基本の知識を要する設問もあるが、昨年センター試験よりもやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	大問数6は昨年センター試験から変更なかったが、解答数は36個から減少して32個となった。第5問、第6問は日本史Aとの共通問題。
【出題形式】	試行調査と同様の生徒の学習場面が第1問、第2問、第6問で用いられ、ブラジルの新聞や、小判の重量と金の成分比率のグラフ、荘園絵図などの多様な史資料が扱われた。文章選択問題は昨年センター試験の11問から6問に減少し、評価と根拠などの組合せ問題が出題された。年代整序問題は、昨年センター試験の5問から4問に減少した。なお、試行調査でみられた連動型は出題されなかった。
【出題分野】	昨年センター試験より社会経済史が増加し、文化史が減少した。また近現代史が重視される傾向は変わらず、現代史が増加した。
【問題量】	解答数は昨年センター試験よりも減少しているが、資料が増加し、全体の情報量は増加しているため、昨年センター試験並。
【難易】	昨年センター試験よりもやや難化。

2. 大問別分析

第1問「貨幣の歴史」 (18点・解答数6)

古代から現代までの貨幣の歴史について、各時代の貨幣の在り方が問われた。問6では、ブラジルの新聞とその解説文が扱われ、解説文の情報を取り出して既知の知識を組み合わせ活用することが求められた。

第2問「日本における文字使用の歴史」 (16点・解答数5)

「日本における文字使用の歴史」をテーマに、Aでは、倭国における漢字の流入及び使用について、政治・外交分野から出題された。Bでは、律令国家の形成と文字使用の展開について、政治・文化分野から出題された。問1では、中国諸王朝の領域表示から、各地図がそれぞれ1世紀・3世紀・5世紀であることを判別することが求められた。

第3問「中世の都市と地方との関係」 (16点・解答数5)

院政期から戦国期にかけての都市と地方との関係をテーマとしたリード文に対し、荘園に関する史料や絵図を用いて、社会・政治・文化の各分野から出題された。問2は荘園絵図を読み解く方法とその方法によりわかる内容の組合せという、新しい形式の出題であったが、丁寧に文章と図版を照らし合わせて考えれば正答できるものであった。

第4問「近世社会の儀礼や儀式」 (16点・解答数5)

近世社会の儀礼や儀式、休日に関する史料を題材として、江戸時代について、政治史を中心に外交・文化の各分野から出題された。問1では、江戸城本丸御殿の模式図に示された部屋割りのデータの読み取りと大名に関する知識の理解が問われた。Yでは具体的な藩主の事績と藩名、その藩の大名の種別をおさえておくことが求められた。

第5問「景山英子（福田英子）と近代の社会」（12点・解答数4）

景山英子の事績をテーマとした人物史で、幕末から明治期の政治・社会について出題された。問3では、景山英子の書いた『妾の半生涯』の読み取りと、教育制度の変遷についての理解が求められた。

第6問「農地改革」（22点・解答数7）

戦後の農地改革の性格や意義に加えて、地租改正以後の寄生地主制の変遷の理解を求めた出題であった。問3・問5では、寄生地主制が単純に発展したのではなく、大正・昭和期の社会の変化により動揺したことを読み取る思考力が問われた。

3. 過去5ヵ年の平均点（大学入試センター公表値）

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	65.45	63.54	62.19	59.29	65.55

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 世界史B

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 多様な資料を読解する力が求められ、多面的・多角的に考察する必要が大幅に高まった —

昨年センター試験と比べると、リード文と設問の関連性は大幅に高まり、また、多様な資料の読解が求められた。思考力を要する問題が大幅に増加したため、昨年センター試験よりもやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年のセンター試験と比べると、大問数は4大問から5大問に増加し、解答数は36個から34個に減少した。
【出題形式】	文献資料、地図やグラフなど、多様な資料が使用され、3つの文献資料を年代順に並び替える問題や、同一の文献資料の改ざん前と後を比較する問題など、これまでのセンター試験と比較して資料を多面的・多角的に考察する問題が多く出題された。試行調査でみられた運動型の問題は出題されなかった。
【出題分野】	地域は西ヨーロッパと東アジアからの出題が多く、各時代からバランスよく出題された。分野では、昨年のセンター試験と同様に、政治史が多く出題された。
【問題量】	昨年のセンター試験と比べて増加。
【難易】	昨年センター試験よりもやや難化。

2. 大問別分析

第1問「資料と世界史上の出来事との関係」 (15点・解答数5)

Aでは『史記』とその解説文と始皇帝の逸話、Bでは歴史家マルク＝ブロックの著書をもとに、テーマに沿った出題がされた。問3では、『史記』の解説から読み取ったことと知識を結びつけて、司馬遷の意図を推測することが求められた。問4では、著書から資料の信ぴょう性を考察することが必要であったため、難しいと感じた受験生が多かっただろう。

第2問「世界史上の貨幣」 (18点・解答数6)

Aではイギリスにおける金貨鑄造量の推移と紙幣流通量の推移をあらわした2つのグラフ、Bでは博物館に展示されたアジアの貨幣に関する会話文から設問が展開された。問2では、2つのグラフを比較して関連性を読み取り、仮説を考察することが要求された。問6では、会話文から空欄に当てはまる人物を想起し、その人物の事績を答える必要があった。

第3問「文学者やジャーナリストの作品」 (24点・解答数8)

Aでは『デカメロン』とその解説、Bでは大庭柯公のロシアの革命運動に関する論評、Cではジョージ＝オーウェルの小説『1984年』についての討論を題材に展開された。問5では、論評を詳細部分まで読み取り、その内容を知識と結びつけて考える力が必要であった。問8では、同一の資料の改ざん前と改ざん後と比較し、改ざんの意図を考察することが求められた。

第4問「国家や官僚が残した様々な文書」 (26点・解答数9)

Aではベルリン条約、Bでは上野動物園での会話文、Cでは英領インド統治に関する文書とそれに関する授業を中心に大問が展開された。問5では、3つの文献資料がいつの時代のものであるかを読み取り、それを時代順に並び替えることが要求された。問7では、資料中の空欄を補充したうえで、資料を読解し、知識と組み合わせる力が求められた。

第5問「旅と歴史」 (17点・解答数6)

Aではヨーロッパにおける旅と歴史、Bでは韓国における石碑に関する会話文をテーマに出題された。問3では、古代ローマによる周辺地域の征服過程を想起して、3つの地域が古代ローマに支配された時期を判断することが求められた。問5は、朝鮮が朱子学を重んじたことを前提に、その朱子学を批判した王守仁から朱子学を想起する問題であった。

3. 過去5カ年の平均点（大学入試センター公表値）

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	62.97	65.36	67.97	65.44	67.25

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 地理B

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 資料読解重視の傾向は継続。主題図など多様な資料の読解力と地理的思考力が問われた —

仮想の地域の地図や、地理院地図を含む多様な資料が用いられ、図表読解力と地理的思考力が問われた。第1問は探究活動や授業の場面設定で大問が展開された。問われた知識は標準的であったが、限られた時間の中で正確に資料を読解する力が問われ、昨年センター試験より難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	大問数は、昨年のセンター試験の6から5に減少した。解答数は、昨年のセンター試験の35個から3個減少し、32個になった。第5問が地理Aとの共通問題。
【出題形式】	ほぼすべての設問において資料が出題され、地図、グラフ、写真など多様な資料が扱われた。また、昨年のセンター試験と比べ、複数の素材を組み合わせる出題が増加し、特に文章が数多く扱われた。解答形式では、昨年センター試験ではみられなかった8択の問題が出題されたほか、第1問では誤りを含むものをすべて選んだ組合せを選択する問題が出題された。
【出題分野】	「世界の自然環境」「産業」「都市と人口」「アメリカ合衆国の地誌」「京都府宮津市の地域調査」からの出題構成。昨年センター試験で出題された比較地誌の大問はみられなかった。
【問題量】	ページ数は昨年のセンター試験並であったが、大問数、解答数は減少し、全体的な問題量はやや増加。
【難易】	昨年センター試験より難化。

2. 大問別分析

第1問「世界の自然環境」 (20点・解答数7)

世界の自然環境について、AとBの2パートによる構成で出題された。Aパートは気候の成り立ちやその変動の影響についての探究活動をテーマに出題され、Bパートは世界の代表的な山を教材とした授業場面の設定で展開された。原理・原則を踏まえて考察する問題が主であったが、題意の把握に時間を要する出題もみられた。問6は、氷河の縮小に伴って、氷河に覆われた地域から流出する水の構成要素やその変化、それが生活に与える影響について判断する問題。氷河縮小のピーク期には夏に氷河が融けた水が多くなると考え「h」と判断する。資料から氷河の縮小が生活に与える影響を具体的にイメージできたかどうかで差がついたと思われる。

第2問「産業」 (20点・解答数6)

産業について、農業、工業、商業の各分野から問われた。問3は、仮想の地域における工場の建設候補地から、総輸送費が最小となる地点を判断する問題。条件から必要な情報を取り出したうえで、工場の立地に関する原理・原則を踏まえて考察すれば、選択肢4の総輸送費が最小となると判断できる。具体的な事象をただ暗記するのではなく、「なぜ、そうなるのか」も含めて理解することが求められた。

第3問「都市と人口」 (20点・解答数6)

都市と人口について、さまざまな資料を用いて出題された。問われた知識は標準的なものが主であったが、複数の資料から複合的に考察する問いが多く、解答に時間を要した受験生もいたであろう。問5は日本の3つの地域における居住者のいない住宅の割合とその内訳を、それぞれの地域の特徴を手がかりに判断する問題。別荘の割合が高い「タ」は、観光やレジャーのために多くの人々が来訪する「E」、空き家の割合が高い「ツ」は高齢化や過疎化によって人口減少が進んでいる「F」と考える。初見の資料から読み取れる内容を、既習の知識と結びつけて考察する力が求められた。

第4問「アメリカ合衆国の地誌」 (20点・解答数7)

アメリカ合衆国について、AとBの2パートによる構成で出題された。問1では、アメリカ合衆国の人口分布の重心の移動について、現象とその背景を2小問にわけて出題された。Bパートでは「アメリカ合衆国の社会と経済の多様性」について問われた。問6は、2012年と2016年のアメリカ合衆国の大統領選挙における各州の選挙人の数と選挙人を獲得した候補者の政党を示した図が扱われた。製造業が衰退している地域においてどのような政策が求められるか考察する必要があった。

第5問「京都府宮津市の地域調査」 (20点・解答数6)

京都府宮津市について多様な資料が扱われた。聞き取り調査の結果から事象の背景を考察する問題も出題され、資料読解力と論理的思考力が問われた。問4は、丹後ちりめんの特徴や動向についてまとめた資料中の空欄に当てはまる語を判別する問題。日本の自然環境に関する基本的な知識が問われたほか、地場産業の海外進出の戦略を考察する思考力が求められた。問6は、2018年の外国人の延べ宿泊者数と、その2013年に対する比を示した2枚の地図から読み取れることがらとその背景を判断する問題。資料を丁寧に読み取れば、判断は難しくはない。

3. 過去5カ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	66.35	62.03	67.99	62.34	60.10

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 倫理

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 会話やレポートなどを素材に、現代の倫理的諸課題について深い考察が求められた —

出題分野は第1問で源流思想、第4問で青年期と現代の諸課題が扱われた。形式は従来のリード文に加え、生徒の会話やレポートが増えるなどの変化があった。思想家の考え方の理解をもとに、現代の倫理的諸課題について考察する問題が多く、資料も多用された。取り組みやすい問題も多く、昨年センター試験よりやや易化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	大問数4は昨年のセンター試験と比べて変更なし。解答数は33個で昨年のセンター試験と比べて4個減少した。すべての大問で「倫理、政治・経済」との共通の設問が出題された。
【出題形式】	昨年のセンター試験と比べて、問題ページ数は1ページ増加。2から3のパートに分かれて出題される大問もみられた。文章選択問題が減少し、組合せ問題が増加した。昨年のセンター試験と比べて、図版や原典資料などが多く扱われた。なお、試行調査でみられた連動型は出題されなかった。
【出題分野】	特定の分野に偏ることなく幅広く出題され、第1問で源流思想分野、第2問で日本思想分野、第3問で西洋思想分野、第4問で青年期分野と現代の諸課題分野が現代の思想と合わせて出題された。
【問題量】	昨年センター試験並。
【難易】	昨年センター試験よりやや易化。

2. 大問別分析

第1問「『恥』の観点から捉える源流思想」（24点・解答数8）

源流思想分野からの出題。問4は上座部仏教の思想家の原典資料が用いられ、原典資料とそれを読んだ生徒の会話文を読み取る力が求められた。問5は規範や社会秩序について源流の4分野にわたってそれぞれ問われ、基本的な知識があれば解答できた。問6は荘子の資料から諸子百家の思想の相互関係や批判点を問うており、資料を正確に読み取ることが求められた。

第2問「日本における時間の捉え方と人生観・世界観」（24点・解答数8）

日本思想分野から、各時代・分野にわたって幅広く問われた。問1は『古事記』における神の概念についての理解と、『神統記』の原典資料を読み取る力が求められた。問3は、基本的事項を問いながら道元の時間観念を学ぶという新たな視点からの出題であった。問8は図版を使わない芸術分野からの出題であり、高村光太郎の資料を正確に読み取ることで「芸術作品の永遠性」を理解できるかがポイントであった。

第3問「良心をめぐる西洋近現代思想の流れ」（24点・解答数8）

西洋思想分野から、知識を求める設問と思考力を求める設問がバランスよく出題された。問1は、ルターの思想についてエリクソンが論じた文章の内容について問われたが、正誤のポイントは明確であった。問6は、フッサールの現象学とヘーゲルの精神現象学に関する正確な知識が求められた。問8は、良心をテーマに展開したリード文とそれに基づいた先生と生徒の会話文を読んだうえで、文意に沿う文章を選ぶ問題であった。

第4問「歴史の多様性とその捉え方」（28点・解答数9）

青年期分野と現代の諸課題分野から出題され、現代の思想と絡めて幅広く問われており、会話文の内容をしっかりと捉えることが必要であった。問1では、リオタールやヨナスなどの思想の特色をつかむとともに、用語を正確に理解することが問われた。問4では、問題のなかで説明された、問題焦点型対処というストレスを抱えた場合の対処方法について理解し、日常生活に落とし込むことができたかどうか問われた。

3. 過去5ヵ年の平均点（大学入試センター公表値）

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	65.37	62.25	67.78	54.66	51.84

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 倫理、政治・経済

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 「政治・経済」分野では資料をもとに考察する力を問う問題が出題された。独自問題なし —

すべての設問が単独科目「倫理」および「政治・経済」と共通であった。政治・経済分野では、資料や模式図を用いた考察問題が多くみられた一方で、倫理分野では、リード文と会話文を結び付けて考える問題がみられたが基本的な事項を問う問題が中心であり、難易は昨年センター試験並。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	大問数は7で、昨年のセンター試験と比べて1大問増加。解答数は33個で、昨年のセンター試験と比べて4個減少した。「倫理」は4大問で解答数は16個、「政治・経済」は3大問で解答数は17個。また、昨年のセンター試験と同様、「倫理、政治・経済」の独自の設問はなかった。
【出題形式】	昨年のセンター試験と比べ、問題ページ数は7ページ増加。両分野ともに、文章選択問題が減少し、組合せ問題が大幅に増加した。倫理分野では試行調査でみられた連動型の問題は出題されなかった。政治・経済分野では4つの選択肢から2問の解答を選ぶ問題が出題され、7択の問題が5問出題された。
【出題分野】	昨年のセンター試験と同様、「倫理」および「政治・経済」の各分野から網羅的に出題された。「倫理」では、昨年のセンター試験の第2問と第3問で出題された源流思想が、第1問で出題された。
【問題量】	昨年のセンター試験に比べ増加。特に政治・経済分野で大幅に増加した。
【難易】	昨年センター試験並。

2. 大問別分析

第1問「『恥』の観点から捉える源流思想」（12点・解答数4）

「倫理」源流思想分野からの出題。基本的な知識を問う問題が中心だった。問4は上座部仏教の思想家の原典資料が用いられ、原典資料とそれを読んだ生徒の会話文を読み取る力が求められた。

第2問「日本における時間の捉え方と人生観・世界観」（12点・解答数4）

「倫理」日本思想分野からの出題。問1は『古事記』の内容とヘシオドスの『神統記』の内容を比較する問題。古事記における神の概念についての理解と、『神統記』の原典資料を読み取る力が求められた。問2では写真が用いられたが、阿弥陀仏の来迎と末法思想について理解している生徒は解答を導くことができたであろう。

第3問「良心をめぐる西洋近現代思想の流れ」（12点・解答数4）

「倫理」西洋思想分野からの出題。昨年のセンター試験と同様、1ページにわたってリード文が展開された。問4は、良心をテーマに展開したリード文とそれに基づいた先生と生徒の会話文を読んだうえで、文意に沿う文章を選ぶ問題であった。

第4問「歴史の多様性とその捉え方」（14点・解答数4）

「倫理」現代思想分野からの出題。歴史をテーマに展開される会話文がリード文として提示された。問1では、問題のなかで説明された、問題焦点型対処というストレスを抱えた場合の対処方法について理解し、日常生活に落とし込むことができたかどうか問われた。

第5問「法と人権、政治体制」（19点・解答数6）

「政治・経済」政治分野中心の出題。判例を用いた問題が目立った。問3は最高裁の判例や学説を示した3つの資料を読み取り、義務教育の無償化について考えさせる問題であった。問4はふるさと納税制度などの時事的理解が求められた。

第6問「日本の労働、財政・金融や国際経済の現状」 (19点・解答数6)

「政治・経済」経済分野・国際経済分野からの出題。考察する力を問う問題が目立った。問3はある国の国家財政における歳出と歳入の項目別の金額を示した表を読み取り、計算をしながら解答を導く問題。資料の丁寧な読み取りが必要であった。問4は金融についての知識と資料の読解・考察を求める難易度の高い問題であった。

第7問「日本による発展途上国への開発協力のあり方」 (12点・解答数5)

「政治・経済」政治分野・国際経済分野からの出題。国際協力を切り口に、探究活動の発表のための資料がリード文で用いられた。問4では、日本が援助を行う理由を説明したノートにある、2つの空欄にあてはまる文章を選ぶ問題。日本の国際貢献の意義を論理的に考えさせようとする工夫が見られた。

3. 過去5カ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	66.51	64.22	73.08	66.63	60.50

— ダイヤモンドや蛍光灯など、身近な素材をテーマに考察させる問題が出題された —

物理の全分野から出題された。ダイヤモンドが明るく輝く理由を、与えられたグラフをもとに考察させる問題が出題された。また、蛍光灯をテーマに、電子と水銀原子の衝突について考察させる点は目新しい。思考力を問う出題が多く、昨年のセンター試験よりもやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年のセンター試験と比べて大問数は6から4に減少し、20個であった解答数は24個に増加した。
【出題形式】	現象の考察を文章で問う問題が増加し、語句・文章選択問題を中心に出版された。昨年のセンター試験でみられた選択大問はなくなり、全問必答となった。
【出題分野】	昨年のセンター試験と同様、特定の分野に偏ることなく、幅広く出題された。
【問題量】	昨年センター試験並。
【難易】	昨年センター試験よりやや難化。

2. 大問別分析

第1問「小問集合」 (25点・解答数5)

原子を除く、物理の各分野から出題され、基本的な事項についての理解が問われた。問1は、加速度運動する台車上に置かれた水そう内の水面、およびおもりをつり下げた糸の傾きを問う慣性力についての基本的な問いであった。問4は壁を背におんさを持って歩く場合のドップラー効果によるうなりについて、定性的な理解を求める問題であった。問5は、円筒容器中にピストンで閉じ込められた理想気体の等温変化と断熱変化について p - V グラフをもとに比較する問題で、思考力を必要とし、差がつきやすい問いと思われる。

第2問「電磁気」 (25点・解答数8)

Aは、抵抗とコンデンサーからなる直流回路の問題であった。問1は、スイッチを閉じた直後の等価回路と電流値についての数値穴埋め形式の問題であった。問3は、電流が変化しないことから、コンデンサーの電圧がつねに0であることに気づけたかどうかのポイントである。Bは、磁場中にある金属レールにおかれた2本の導体棒を素材とした電磁誘導の問題であった。問6は、問5で問われた2本の導体棒に流れる電流が磁場から受ける力をヒントに、系の運動量の保存が成立していることに気づく必要があった。

第3問「波動、電磁気、原子」 (30点・解答数7)

Aは、光の全反射に関する問題であった。ダイヤモンドに入射した光の屈折・全反射を題材として、ガラスよりも明るく輝く理由を与えられたグラフを比較して考察する問題。ただし、問3の後半は教科書の知識をもとに解答できる問題であった。Bは、身近な素材である蛍光灯内の水銀原子からの紫外線の発生をテーマにした、電子の運動、電子と水銀原子の衝突の問題であった。電子と水銀原子の衝突を、弾性衝突と水銀原子が励起される衝突の2種類で比較させる点は目新しい。

第4問「力学」 (20点・解答数4)

キャッチボールを題材に、放物運動と衝突、運動量保存、力学的エネルギーの変化について問う問題であった。問1は、放物線の形状と高低差から、ボールの速さと水平方向とのなす角の大小関係を問う問題であった。問2は、捕球の直前直後でBさんとそりの運動量の和の水平成分が保存することが分かれば解答できる。問3は、捕球によってボールの鉛直方向の運動がなくなったことに気がつけば解答できる。問4は、会話文での出題であり定性的な理解が問われた。

3. 過去5ヵ年の平均点（大学入試センター公表値）

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	60.68	56.94	62.42	62.88	61.70

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 化学

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 初見の反応や実験の問題が多く出題され、読解力や思考力が要求された —

大問数が昨年の7問から5問に減少し、配点は全大問20点に変更された。読解力や思考力を要する問題が数多く出題された。鉄の錯イオンに関わる見慣れない実験を題材にした問題や、グルコースの実験を題材にした必要に応じて方眼紙を使う問題が目新しい。昨年センター試験よりやや難化。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年のセンター試験と比べて大問数は7から5に減少、解答数は28個に減少（昨年のセンター試験は32個）。
【出題形式】	数値選択問題を中心に出题された。昨年までのセンター試験でみられた選択大問はなくなり、全問必答となった。
【出題分野】	昨年のセンター試験と同様、特定の分野に偏ることなく、幅広く出題された。
【問題量】	昨年のセンター試験と比べて29ページであったページ数は23ページになり、減少。
【難易】	昨年センター試験よりやや難化。

2. 大問別分析

第1問「物質の状態と平衡」 （20点・解答数5）

金属元素の基本的性質、体心立方格子に関する文字式の計算、物質の溶解と分子間力、エタノールの蒸気圧曲線について出題された。問4 aは、問題文で与えられた操作から求めたエタノールの蒸気圧をもとに、蒸気圧曲線からエタノールが凝縮するときの温度を読み取る問題で、その温度の数値そのものをマークする解答形式で問われている点が目新しい。bは、2種類のシャルルの法則のグラフと、蒸気圧曲線から、問題文の操作に合わせた圧力の変化を読み取る問題で、蒸気圧と気体の状態方程式を結びつける力が問われた。

第2問「物質の状態と平衡、物質の変化と平衡」 （20点・解答数5）

化学反応と光、空気亜鉛電池、水の状態変化・分子間の結合・エネルギーの関係について出題された。問2は、見慣れない空気亜鉛電池が題材の計算問題であった。問3 aは、水の状態図が与えられていないので、描いて考える必要があった。問3 bは、氷の昇華熱から水素結合を切断するのに必要なエネルギーを算出する問題であり、水1 molあたりの水素結合数が2 molであることがわかったかがポイントであった。問3 cは、融解熱、蒸発熱、比熱を考慮した計算問題であり、多くの情報を適切に処理する必要があった。

第3問「物質の変化と平衡、無機物質」 （20点・解答数6）

金属単体の製法や反応についての知識問題、錯イオンの光による反応についての実験内容を理解して考察する問題が出題された。問1では、ナトリウムの製法についての反応と量的関係が問われた。問2は、金属単体の反応から金属を特定する問題であり、周期表の知識も必要であった。問3は、鉄の錯イオンの光による反応について、結果を考察する問題であった。見慣れない実験内容を理解したうえで鉄イオンの検出や反応量に関して計算する力が求められた。特に問3 cは、反応した錯イオンの割合を問う点が目新しい。

第4問「有機化合物、高分子化合物」 （20点・解答数6）

芳香族化合物の反応、油脂、アルコールの酸化と脱水、合成高分子化合物、ポリペプチドなどが出題された。問3 aでは、アルコールの分類と酸化生成物の関係が問われた。問3 bは、アルコールの脱水生成物の異性体の数を考える問題であった。問5は、ポリペプチド鎖の分子量と単量体となるアミノ酸の分子量、

らせん構造のひと巻きのアミノ酸単位の個数から、ポリペプチド鎖の全長を求める目新しい問題であった。

第5問「物質の変化と平衡、天然高分子化合物」 (20点・解答数6)

グルコースの水溶液中での平衡と反応に関する問題であった。問1aは α -グルコースと β -グルコースの平衡反応の量的関係を問う問題であった。問1bは α -グルコースの変化量をグラフに正確に描き、そこから変化に要した時間を読む必要があった。問1cは、新たに追加したあとの平衡時の量を求めるために、平衡定数を導く必要があり、思考を要する問題であった。問1bcは、問1aの解答をもとに答える必要があった。問2は、グルコースの還元性を示す理由を正しく考えて、グラフを選ぶ問題であった。問3aは、教科書では扱われていないグルコースの酸化分解に関する問題であった。問3bは、グルコースの反応の量的関係で、炭素原子に着目すれば導きやすい問題であった。

3. 過去5ヵ年の平均点 (大学入試センター公表値)

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	54.79	54.67	60.57	51.94	54.48

2021年度大学入学共通テスト・分析表 科目 生物

■ベネッセ・駿台共催／データネット実行委員会

— 分野融合問題が多く出題され、複数の資料を科学的に分析する思考力が求められた —

全大問必答で、従来のセンター試験のように大問ごとに分野を分けた出題ではなく、多くの大問で分野融合問題が出された。大問間での配点や構成のばらつきも大きかった。複数の資料を解釈するなど科学的思考力が問われるが、題意が把握できれば解答しやすい問題が多く、昨年のセンター試験より易化した。

1. 全体概況

【大問数・解答数】	昨年のセンター試験と比べて大問数は7から6に減少、解答数は27個に減少（昨年のセンター試験は選択する問題によって異なり34または35個）。
【出題形式】	文章選択問題を中心に出题された。昨年までのセンター試験でみられた選択大問はなくなり、全問必答となった。
【出題分野】	昨年のセンター試験と同様、特定の分野に偏ることなく、幅広く出題された。
【問題量】	昨年センター試験並。
【難易】	昨年センター試験より易化。

2. 大問別分析

第1問「生命現象と物質、生物の進化と系統」（14点・解答数4）

ラクターゼ遺伝子を題材に、糖の吸収、遺伝子発現、遺伝子頻度、分子進化などを扱った融合問題であった。問1は、小腸におけるグルコースの吸収と大腸における大量の乳糖の影響を考察する問題。問2は、ラクターゼの遺伝子頻度の計算問題。問3は、真核生物の遺伝子発現に関する知識問題。問4は、人類におけるラクターゼ遺伝子の分子進化を、与えられた情報をもとに推定する問題であった。

第2問「生態と環境、生物の進化と系統」（15点・解答数4）

外来生物導入後の在来種の形態変化を題材に、種間関係および進化について考察する問題が出された。問1では、外来生物に関する基本的な知識が問われた。問2は、導入区と非導入区の結果を示したグラフをもとに、外来生物が在来種に与えた影響を考察する問題であった。問3は、異なる調査の結果を示した複数のグラフをもとに、外来生物が在来種に与えた影響を考察する問題であった。問4は、外来生物の導入によって在来種にみられた表現型の変化について、複数の実験結果をもとに考察する問題であった。

第3問「生態と環境」（12点・解答数3）

ある落葉樹林の林床に発達した複数の種からなる草本植物群集における、早春と初夏の生産構造図を読み取って考察する、会話文形式の問題であった。問1、2は、生産構造図から葉の乾燥重量や光量を読み取り、草本群落内で生じた現象を考察する問題であった。問3は、早春と初夏の葉について、与えられたデータをもとに二酸化炭素吸収量を計算し、比較する問題であった。

第4問「生物の環境応答」（13点・解答数4）

動物の行動に関する問題であった。問1は、動物の行動の事例について学習が関与するかどうかを判断する問題であった。問2では、さえずりに関する初見の実験について、異なる条件における実験結果から結論を導くことが求められた。問3は、競争的排除をもたらす繁殖干渉について、論理的な思考力を問う問題で、考察文の空欄を補充する形式で出された。

第5問「生殖と発生、生物の環境応答、生命現象と物質」（27点・解答数7）

A、Bの2中間構成であった。Aでは、植物の生殖と発生が出題された。問1では、被子植物の発生と生殖に関する正確な理解が求められた。問2、3は、葉の形成に関する実験結果をもとに科学的に推論する問題であった。Bは、光合成と分化および植物ホルモンとの関係を題材とした分野融合問題であった。問

4では、植物ホルモンと分化の関係について、実験結果をもとに推定することが求められた。問5は、植物ホルモンに関する知識と与えられた情報の類似性を判断する問題であった。問6は光合成、問7は分化について、それぞれの実験計画の適切さを判断する目新しい問題であった。

第6問「生殖と発生、生物の環境応答」（19点・解答数5）

A、Bの2中間構成であった。Aでは、脊椎動物の眼を題材として、器官形成のしくみを問う問題が出された。問2は、器官形成のしくみをふまえて、進化の過程で眼を形成しなくなった理由について考察する問題であった。Bでは、オタマジャクシのノーアイ、テイルアイを用いた眼の役割に関する実験考察問題が出題された。問4は、オタマジャクシの眼に入る光の情報と学習効果が現れる条件について、問5は、学習効果率のグラフから尾にできた眼が受ける光の色の情報伝達について考察する問題であった。

3. 過去5ヵ年の平均点（大学入試センター公表値）

年度	2020	2019	2018	2017	2016
平均点	57.56	62.89	61.36	68.97	63.62